

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02160

研究課題名（和文）言語の学習と拡張における知覚の役割の解明 - 後期ウィトゲンシュタインの思索を通じて

研究課題名（英文）Elucidation of the role of perception in learning and expansion of words on the basis of later Wittgenstein's thought

研究代表者

山田 圭一（Yamada, Keiichi）

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：30535828

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、言語の学習と拡張において知覚が果たす役割をウィトゲンシュタインの「アスペクト知覚」というアイデアをもとに明らかにした。まず、直示的な教示（指さしによる言葉の教示）によって一般的な語の使用が可能となるためには、対象の見方の転換が必要であることを明らかにしたうえで、それを「範例として見る」というアスペクト知覚として取り出した。次に、われわれの言語を拡張する比喩的な表現をいくつかのタイプに分類したうえで、それらが「類似性を見る」というアスペクトの気づきに基づくものであることを解明したうえで、新たな言語ゲームを生み出す創造的な体験のあり方を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、第一にウィトゲンシュタインの言語観の転回の根底の部分にあった語りえぬ体験の次元を明らかにしたという点にある。第二に、言語の学習と拡張におけるアスペクト知覚の役割を明らかにすることで、言語哲学と知覚の哲学とを架橋する哲学研究の可能性を提示したという点にある。そして社会的な意義としては、AI研究の進展を通じて再び脚光を浴びつつある「記号接地問題」（記号が記号内のネットワークを超えていかにして感覚経験と結びつきつづるのかという問題）についてウィトゲンシュタイン的な回答を提示することで、記号の意味を巡る問題に一つの回答の選択肢を提示した点にある。

研究成果の概要（英文）：This study elucidated the role of perception in learning and expansion of words by use of Wittgenstein's concept of aspect-perception.

First, I considered what is the condition of "ostensive teaching of words" and demonstrated that a learner has to change the way of seeing the object: see it as a paradigm. Second, I examined the condition of metaphorical extension and concluded that a speaker has to "notice an aspect" which contains seeing the similarity.

On the basis of these study results, I explained how these ways of seeing objects could produce new language games.

研究分野：分析哲学、言語哲学、知覚の哲学

キーワード：ウィトゲンシュタイン 知覚 言語学習 アスペクト メタファー

1. 研究開始当初の背景

言語と論理の哲学者として有名なウィトゲンシュタインの言語観は、その思索の時期によって大きく変化していることがよく知られている。従来のウィトゲンシュタイン研究では、この変化を前期の『論理哲学論考』(以下、『論考』と省略)における「私の言語」から後期の『哲学探究』(以下、『探究』と省略)における他者と共有可能な「公共言語」への転換として、あるいは、世界と言語との写像関係で意味を捉える立場から言語ゲームにおける語の使用において意味を捉える立場への転換として説明するものがほとんどであった。

しかし私はこのような転換の背景には、彼が言語へ向ける眼差しのより根本的な変化があったと考えている。それは、語の意味が確定・固定した静的な言語についての探究から、意味が生成・変化する言語の動的な側面の探究への転換である。彼のこのような視点からの考察が顕著に現れるのは、(1)『探究』前半部で考察される語の意味の教示と学習の問題を扱っている箇所であり、(2)『探究』第二部(第四版以降では「心理学の哲学一断片」と呼ばれるテキスト)以降で考察される通常の文法規則に反した語の使用の問題を扱っている箇所である。

したがって、このような言語の動的な側面がウィトゲンシュタイン自身の思索によってどのような仕方でも説明できるのかという点を明らかにする研究が必要とされている。

2. 研究の目的

本研究は、上記の背景を踏まえて、言語の学習と拡張においてアスペクト知覚が果たしている役割の解明を通じて、ウィトゲンシュタイン哲学の転換の根底にあった言語の動的な側面の内実を明らかにすることを目指す。

まず言語の学習に関して、語の直示的教示の場面で生じる問題を分析し、語の学習において変化する対象の見方とはどのようなものかを解明することを目指す。次に言語の拡張に関して、教示された意味とは異なる語の二次的意味がどのようにして生まれていくのかを語の意味体験という観点から明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、ウィトゲンシュタインの遺稿を辿りなおす文献研究と、言語と知覚の関係について関連する諸学問の知見について研究を組み合わせることで行われる。

第一に、ウィトゲンシュタインが語の直示的教示の問題に辿り着くまでの問題意識を文献的に辿り直して再構成する。そのうえで、語の学習に必要なアスペクト知覚とその知覚内容について、現代の知覚の哲学の知見等も用いながら解明する。

第二に、言語ゲームの変化と語の二次的意味の関係についてウィトゲンシュタインの文献を辿り直して明らかにする。その上で、メタファー論やマルチモーダルな知覚についての認知言語学、認知心理学、知覚の哲学の知見を援用して、意味の拡張をもたらすアスペクト知覚のあり方を解明する。

以上の二つの方向性の研究を合わせて、ウィトゲンシュタインの言語観の転換点を明らかにする。

4. 研究成果

本研究の成果は、言語の学習と拡張において知覚が果たす以下のような役割を明らかにした点にある。

まず、われわれの言語を拡張するものとしての比喩的な表現について分析し、認知言語学の知見などを援用しながら、『哲学探究』以降のウィトゲンシュタインが取り上げている比喩的な表現を多義図形のアスペクトの転換と類比的なものとして捉えなおすことを試みた。

第一に、「人生は旅である」という通常の概念間のメタファーに関しては、二つの概念のあいだの構造的な類似性をみてとるという点で、「として把握する」という概念に対するアスペクトの転換として捉えることを明らかにした。

第二に、「嘆きのメロディを聴く」というような知覚経験に対する比喩的な表現については、知覚と聴覚という異なる感覚モダリティの対象がもつ構造的な特徴の類似性を見るという点で、「として見る」という視覚的なアスペクト知覚と同様に「として聴く」という構造をもった知覚のあり方であることを明らかにした。

第三に、ウィトゲンシュタインが「二次的な意味」と呼んだ「母音 e は黄色い」のような一見するとナンセンスに思われる表現はこのような通常の比喩と異なり、類似性を見てとられるべき構造をもたないがゆえにその類似性を説明することができないという点を明らかにしたうえで、このような語の意味体験の特徴を「文脈の予感」として取り出した。

以上の分析を通じて、意味の体験が創造的な言語の使用を可能にし、従来の語の用法とは異なる新たな言語ゲームを創り出す可能性を秘めたものであることを明らかにした。

続いて、言語の学習において知覚が果たす役割について分析した。具体的には、ウィトゲンシュタインの『哲学探究』において他者による直示的な教示(指さしによる言葉の教示)によって言語を学ぶ場面に着目し、そこでの教示において知覚が果たす役割を彼がその後の行ったアスペクト知覚の分析をもとに再解釈しなおした。

直示的教示において問題となるのは、指さされている対象がある時点での個体(たとえば、タ

マ)であるにもかかわらず、その語をそのような限定された個体だけではなく一般的に適用できなくてはならないという点にある。このような仕方での言語習得を可能にするものこそ、指さされた対象を個体としてではなく範例として見るというアスペクト知覚であり、それは、個体のディテールを地として背景に退かせ、一般的な特徴のみを図として浮かび上がらせるような対象の見方にほかならない。このように言語の習得がある種の知覚の仕方の習得でもあるという点を明らかにすることを通じて、言語の習得が文字通りの意味で世界の見方の獲得でもあることを明らかにした。

以上の研究成果をもとに、ウィトゲンシュタインの言語観の転換の背景として言語的な表出の違いをもたらす語りえぬ体験の次元があることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 山田圭一	4. 巻 47巻 1号
2. 論文標題 眺望から人称を排除することができるのか 野矢茂樹『心という難問』への懐疑論者からの応答	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『科学基礎論研究』（科学基礎論学会編）	6. 最初と最後の頁 47-55頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.4288/kisoron.47.1_47	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田圭一	4. 巻 49号
2. 論文標題 「言葉の学習におけるアスペクト知覚の役割 ウィトゲンシュタインの直示的教示の考察を通じて」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『人文科学研究』（千葉大学文学部編）	6. 最初と最後の頁 51 - 69頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S03862097-49-P51	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田圭一	4. 巻 46-1
2. 論文標題 言葉の意味の変化をもたらす体験とはどのようなものか ウィトゲンシュタインの比喩的表現の考察をもとに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 科学基礎論研究（科学基礎論学会編）	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.4288/kisoron.46.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山田圭一	4. 巻 4-1
2. 論文標題 人は人ならざるものと恋愛することができるのか 『シェイプ・オブ・ウォーター』と『エクス・マキナ』を題材に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フィルカル（株式会社ミュー）	6. 最初と最後の頁 136-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田圭一	4. 巻 14号
2. 論文標題 本質は本当に必要なのか 同一性と類似性という観点から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 フッサール研究	6. 最初と最後の頁 128-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 山田圭一
2. 発表標題 感覚は言語によってどこまで伝えることができるのか ウィトゲンシュタインの私的言語論を手がかりに
3. 学会等名 第3回 人間知・脳・AIセミナー (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田圭一
2. 発表標題 学校で学ぶ知識に価値はあるのか? - 新学習指導要領を認識論的に分析する -
3. 学会等名 科学哲学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田圭一
2. 発表標題 他人の悲しみを見るときはいかなることか ウィトゲンシュタインの直接知覚説
3. 学会等名 日本現象学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山田圭一
2. 発表標題 言葉が多面体であるとはどのようなことか ゲシュタルト・アスペクト・メタファーの観点から
3. 学会等名 ワイトゲンシュタイン研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田圭一
2. 発表標題 「ゲシュタルト的まとまりは認識論的役割を果たしうるのか」
3. 学会等名 科学基礎論学会例会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 吉川孝・横地徳広・池田喬編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 216頁
3. 書名 『映画で考える生命環境倫理学』（山田圭一「第5章 人はAIと恋愛することができるのか 『her / 世界でひとつの彼女』と『エクス・マキナ』を題材に」、87-101頁）	

1. 著者名 文部科学省編（山田圭一共著、学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 239頁
3. 書名 『高等学校学習指導要領(平成三十年告示)解説 公民編』（第二章第一節「公共」、27-84頁）	

1. 著者名 納富信留・檜垣立哉・柏端達也編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 222頁
3. 書名 『よくわかる哲学・思想』（山田圭一、「ウイトゲンシュタイン」、98-99頁/「子どもの哲学」、200-201頁）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----